青銅器の郷を尋ねて

――陝西寶鷄調査報告――

吉田篤志

青銅器の寶庫

陝西省寶鷄市は青銅器の寶庫と言われるように昔から多くの青銅器が出土している。有名なものでは清代乾隆中葉（一七七〇年前後）に寶鷄市郊渭河南岸から出土した散氏盤（西周厲王時、銘文三五七字、臺北故宮博物院藏）・清代道光初年に寶鷄市岐山縣禮村（or眉縣李村）から出土した大盂鼎（西周康王時、銘文二九一字、現在最大の西周銅鼎、中國國家博物館藏）・清代道光二十三年（一八四三年）に寶鷄市岐山縣禮村から出土した毛公鼎（西周宣王時、銘文四九七字、現在銘文最多の銅器、臺北故宮博物院藏）・清代道光年間に寶鷄虢川（or眉縣虢川司）から出土した虢季子白盤（西周宣王時、銘文一一一字、中國國家博物館藏）・一八九〇年に寶鷄市扶風縣法門鎮任家村から出土した大克鼎（西周孝王時、銘文二九〇字、上海博物館藏）等があり、國外にもかなりの數が流失しており、京都の藤井有隣館藏の小克鼎などもここから出土した青銅器である。その他にも何尊・史墻盤・秦公鎛等の國寶級の青銅器が寶鷄地區から出土している。

二〇〇五年四月から一年間の海外研究の機會を得た私は、研究期間中に是非この寶鷄市へ調査に訪れたいと思っていた。ちょうど大東文化大學人文科學研究所の金文研究班で進藤英幸先生（財團法人無窮會東洋文化研究所所長・元明治

大學教授）を中心に郭沫若著『兩周金文辭大系圖錄攷釋』をテキストにして西周金文を讀解中であったため、研究班のメンバーのうち進藤先生・小林茂氏（流通經濟大學助教授）と私の三名が寶鷄・西安地區の調査旅行をすることになった。

寶鷄青銅器博物館

二〇〇五年八月二九日朝、研究班の三名は北京から陝西省の咸陽國際空港へ飛んだ。約一時間半のフライトである。空港からタクシーをチャーターして約二時間半で寶鷄到着。寶鷄驛（火車站）對面の寶鷄國貿大酒店を宿泊先に選び、午後から寶鷄青銅器博物館を參觀。この博物館は一九九八年九月八日に落成開館した中國でも初めての青銅器專門の博物館で（圖1）、寶鷄地區出土の青銅器が所狹しと竝び、かなりの迫力である。一九七五年二月に岐山縣董家村の窖藏から出土した青銅器（三七件、銘文あるもの三〇件）や、一九七六年一二月に扶風縣莊白村の窖藏から出土した青銅器（一〇三件、銘文あるもの七四件）、近年日本でも東京國立博物館等で展覽されて話題となった二〇〇四年一月に眉縣楊家村の窖藏から出土した青銅器（二七件、全てに銘文があり、總文字數が四〇〇〇字に達し、發掘史上銘文文字數最多の青銅器群である）等が陳列されており、量の多さと質の高さでは中國國家博物館・陝西歷史博物館・上海博物館等にも引けを取らないと言っても過言ではない。

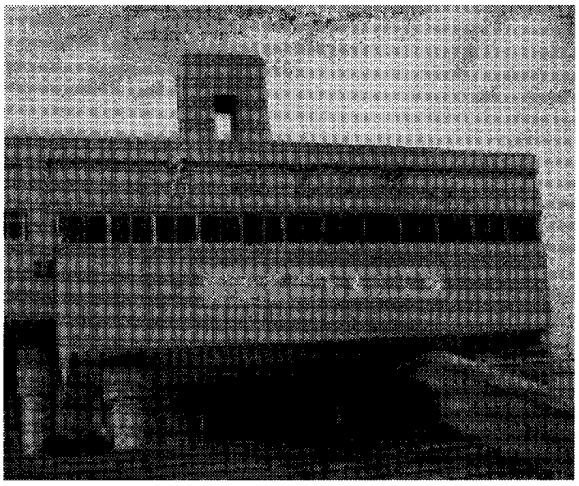


圖1　寶鷄青銅器博物館

博物館の圖錄（『聚寶藏珍』）に據れば、寶鷄地區出土の西周青銅器は一五〇〇〇餘件あり、全國で出土した西周青銅器の半數以上で、種類も全て揃っており、一九

九六年の國家文物局の鑑定では珍貴文物三二八四件、そのうち一級文物が三二二件にも達した。また出土の時間と地點がはっきりしているので、大部分が青銅器研究の標準器になり、また史料的價値が高く、一九六三年に寶鷄賈村から出土した何尊（西周成王時、銘文一二二字、寶鷄青銅器博物館藏）は（圖2）、洛陽（雒邑）建城の時期が確認でき、また〈中國〉の熟語が初めて出現したことでも有名になった（圖3）。またこれらの青銅器は鑄造技術や藝術面に於いても高度の水準に達していたことが分かる。

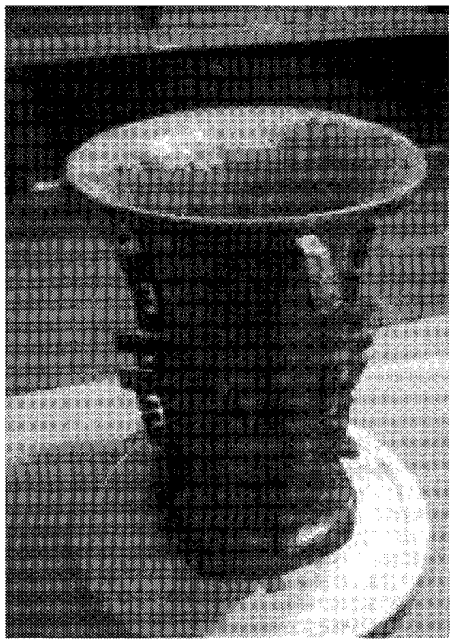


圖2　何尊

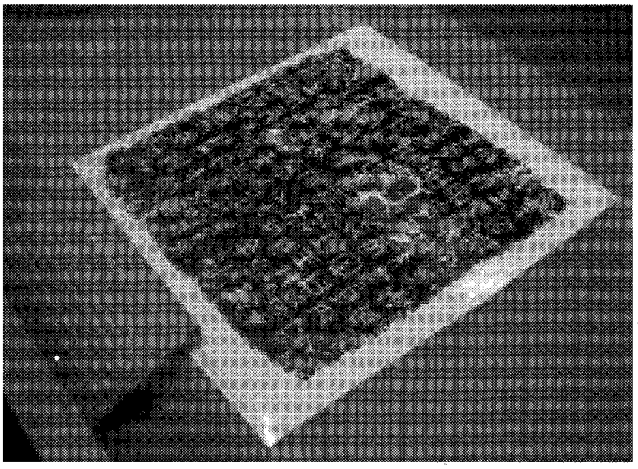


圖3　何尊の銘文拓本

博物館陳列品のうち、岐山縣董家村の窖藏から出土した儼匜（西周晩期、岐山縣博物館藏）は、器蓋に銘文が連なって共に一五七字あり、一篇の法律判決書になっており、最も早い〈青銅法典〉と言われている。また扶風縣莊白村の窖藏から出土した史墻盤（西周中期、銘文二八四字、周原博物館藏）は、文・武・成・康・昭・穆ら六人の周王の史跡と微氏家族史（史墻は微氏族人）が記録されており、〈青銅史書〉と稱されている。また眉縣楊家村の窖藏から出土した逨盤（西周晩期、銘文三七二字、現在寶鷄青銅器博物館に陳列）は、作器者逨（單氏家族）の先祖八代が周室の重臣で、文・武・成・康・昭・穆・恭・懿・孝・夷・厲・宣ら十二人の周王を輔佐した史跡等が記録され、史墻盤に記録された穆王までの西周史を補う形になっている。以上の青銅器のうち儼匜と史墻盤は他の博物館に展示され、寫眞だけが掲げられていた。

一九八一年に寶鷄市郊紙坊頭一號墓から出土した四耳簋（西周早期、大きな取っ手〔四耳〕が特徴で、アメリカのフーリア美術館にも西周初年の器形・紋飾が同様の簋がある。寶鷄青銅器博物館藏）・一九七五年に董家村の窖藏から出土した九祀衞鼎（西周中期、銘文一九五字、同出の九祀衞鼎は陝西歷史博物館藏。岐山縣博物館藏）・董家村の窖藏から出土した衞盉（西周中期、蓋內銘文一三二字、岐山縣博物館藏）・一九七六年に寶鷄市郊竹園溝強國墓地七號墓から出土した伯格卣（大小兩件、西周早期、器蓋同銘文各六字、腹部に立體的な羊首紋あり。寶鷄青銅器博物館藏）・二〇〇三年一月に眉縣楊家村の窖藏から出土した四十二年逨鼎（大小兩件、西周晚期、銘文二八〇字、年・月・日〔干支〕・月相が具わり、曆法研究に新材料を提供。現在寶鷄青銅器博物館に陳列）（圖4）・四十三年逨鼎（大から小まで順次一〇件、西周晚期、銘分は九篇に分鑄、銘文三一六字〔甲〕、現在寶鷄青銅器博物館に陳列）・單五父壺（甲乙兩件、西周晚期、銘文は壺口內壁に一九字〔二箇の重文を含む〕、器蓋同銘各一七字、現在寶鷄青銅器博物館に陳列）・逨盉（西周晚期、蓋內に銘文二〇字、扁平圓形、鳳鳥形の蓋、腹兩側に蜷局を卷く夔龍紋。現在寶鷄青銅器博物館に陳列）・一九七八年に寶鷄縣太公廟村の銅器窖藏から出土した秦公鎛（大中小三件、春秋期、三件銘文同樣、鼓部に銘文一三五字、寶鷄青銅器博物館藏）等は全て展示されていた。一九九二年に寶鷄市郊益門堡の秦人墓から出土した金柄鐵劍（春秋晚期、柄は金質鏤空で綠松石が象嵌されている。寶鷄青銅器博物館藏）は秦始皇兵馬俑の陳列館に展示されている。

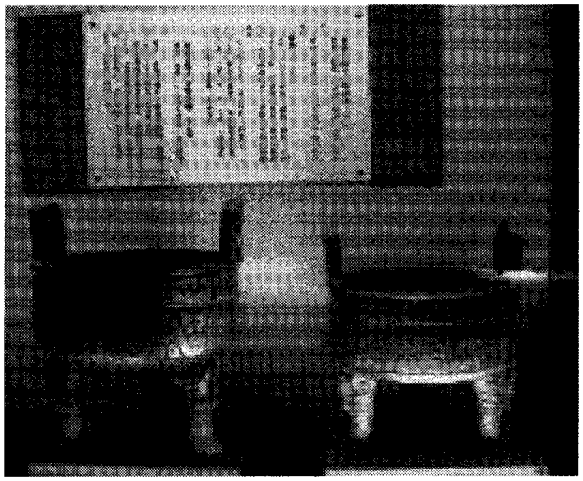


圖4　大小の四十二年逨鼎

また動物を意匠した青銅器で、一九五五年三月に眉縣李村から出土した駒尊（胸の前に九四字の銘文が鑄込まれ、蓋の內に銘文一一字。國家博物館藏）は國家博物館に、一九七五年に寶鷄市郊茹家莊の強國墓地二號墓から出土した貘尊（西周中期、

銘文八字、背の蓋の鈕が虎の形をしている。寶鷄青銅器博物館藏）・強國墓地一號墓から出土した象尊（西周中期、背の蓋は錆付いて開かないため銘文の有無を確認できない。鼻を高く跳ね上げているのが特徴。寶鷄青銅器博物館藏）・一九八八年一一月に茹家莊西周遺跡から出土した魚尊（西周晩期、鯉の形をし、背びれが蓋の鈕になっており、全面に鱗の模様がある。寶鷄青銅器博物館藏）・一九八八年に茹家莊から出土した母子虎（西周中期、母虎が子虎を銜み、體が後ろに傾斜した形になっている。寶鷄青銅器博物館藏）・一九六七年三月に岐山縣賀家村から出土した牛尊（西周中期、背の蓋の鈕が虎の形をしている。陝西歴史博物館藏）・一九七六年一二月に扶風縣莊白村の窖藏から出土した折觥（西周早期、銘文四〇字、周原博物館藏）等は陝西歴史博物館やその他の博物館に展示され、強國墓地一號墓から出土した三足鳥尊（西周中期、四件同出、一件のみ大型。寶鷄青銅器博物館藏）だけが當館に展示されていた。

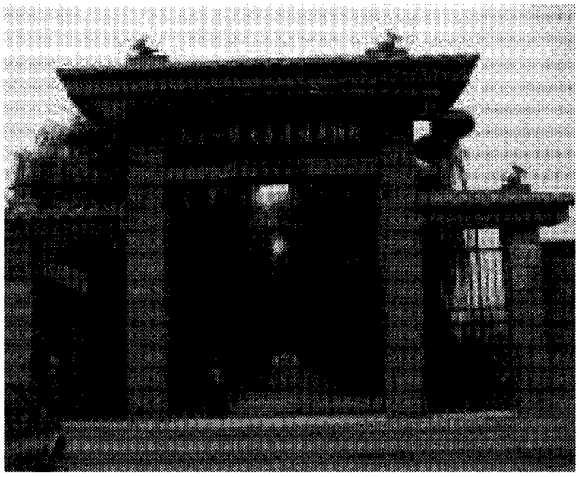
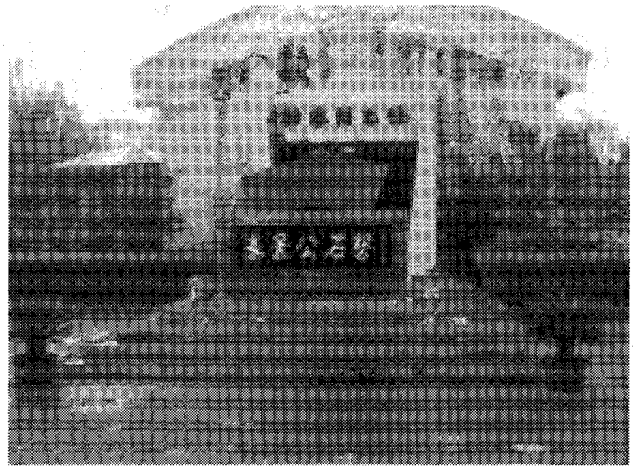


圖5　秦公一號大墓遺址博物館の正門

秦公一號大墓と雍城遺跡

八月三〇日朝九時、再び寶鷄青銅器博物館を訪問。これは昨日閉館間際に日本語が少し分かる館員に日本人向けの説明書の日本語譯を尋ねられ、小林氏が説明書の原稿をホテルに持歸り飜譯を手傳ってやったためである。ついでに圖錄等を購入し、一階の文物店で青銅器の拓本を吟味。日本の書家が多く訪れるようで、拓本の値段もかなり高價である。速盤の拓本などは六〇〇〇元（約七八〇〇〇圓）とのことであった。その後、鳳翔縣の秦公一號大墓遺址博物館を參觀。この博物館は二〇〇〇年に開館した全國初の農民創設の博物館だそうである（圖5）。正門を入って左側に廣大な一號大墓の陪葬車馬坑があり、秦公の權力の强大さを感じさせる。約四十



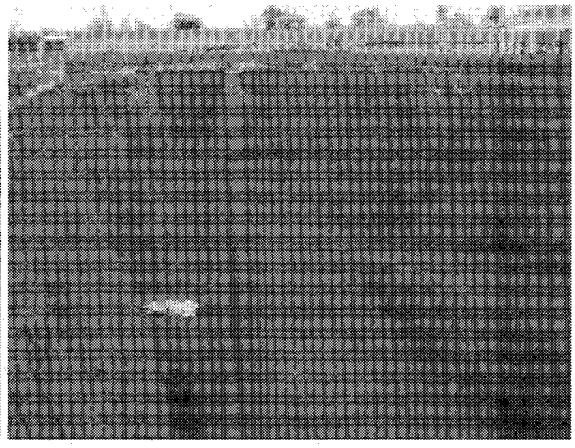


圖7　陳列館の前に置かれた石磬の擴大レプリカ　圖6　秦公一號大墓陪葬車馬坑

車輛（一車輛四馬）出土したが、保護資金の制限により車馬自體は覆土されている（圖6）。さらに進むと陳列館があり、陳列館前には一號大墓から出土した石磬の擴大レプリカが置かれ（圖7）、磬の背面に彫られた銘文（大篆）二七字が見やすく配慮されており、現在最も早い石磬銘文で、現物は西安の陝西省考古研究所に展示され、また別の一件が陝西歴史博物館に展示されている。この大墓からは三四件の石磬および殘缺が出土しているという。陳列館内は一號大墓の墓室を模して作られ、棺椁や陪葬品や小動物（犬？）の尸骨が置かれた腰坑（葬俗）のレプリカが置かれていた。全て農民が報告書等に基づいて製作したものである。

陳列館の右側に車馬坑よりも深く巨大な一號大墓が顔をのぞかせる。一九七五年に陝西省考古研究所雍城考古隊と鳳翔縣文化館が秦公墓葬の探索を開始し、翌七六年の發見から八六年まで一〇年の發掘期間を費やしたほどの規模最大の墓葬である。墓道の全長三〇〇メートル、深さ二四メートル、總面積五三三四平方メートルで、殷墟の王墓の一〇倍、馬王堆一號漢墓の二〇倍の大きさである。ただ歴代の盗洞跡が二四七箇所もあり、そのうち墓室まで届いた洞が二〇餘り（四〇との報告もある）あるため、墓室内の銅器や飾りは持去られ、棺具も酷く破壊されていたということである。それでも發掘調査の結果、金・鐵・陶・玉・漆器・紡績品および石磬等三五〇〇餘件の文物が發見された。またこの大墓からは一八六人（一八四人との報告もある）の殉葬者が發見され、春秋の五霸の一人である穆公（繆公）でさえも殉葬

者一七七人であるから（『史記』秦本紀、繆公三十九年）、墓主はかなりの權力者である。椁室は發掘終了時の一九八六年に保護のために覆蓋され、その周圍には農民が製作復原したという一六四箇の殉葬箱匣が置かれている（圖8）。

中國網（二〇〇五年六月二〇日）の「一九位秦國君王的陵墓到底在何處」（文章來原：『DEEP－中國科學探險』〔中國科學探險雜誌社〕）に據れば、一號大墓から出土した石磬の銘文にある「天子偃喜、龔桓是嗣、高陽有靈、四方升平」の一六字の大意は、「天子 饗宴を擧行す、磬を作りし者は共公・桓公の嗣子。高陽氏〔五帝中の顓頊、秦人の祖先〕天に在して靈あるに因り、國内はもとより四方も升平」であり、ここから推測して、墓主は共公・桓公の繼承人である景公（在位前五七七年～前五三七）であろうとする。また景公は統治四〇年の久しきに及び、雍城時期の在位最長の國君で、穆公・桓公の政略を繼承して中原への東進を怠らず、晉國との多次に亘る交戰にもたびたび勝利して秦國の勢力を增强した、秦國史上においても顯著な地位にある國君であるから、このような巨大な大墓が造營されたとする。

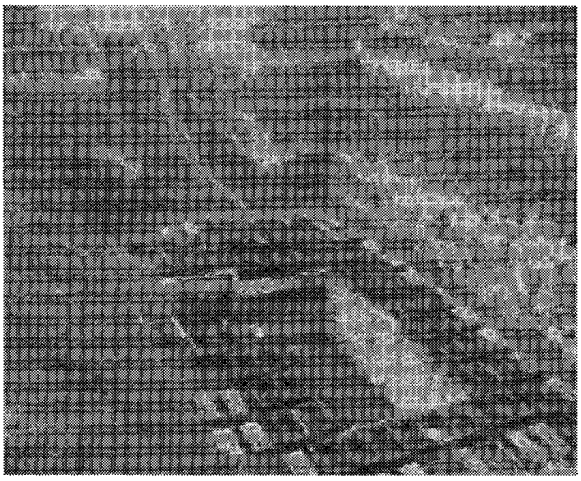


圖8　秦公一號大墓と殉葬箱匣

秦公一號大墓の北方、鳳翔縣城の南邊に位置する雍城遺跡は時閒の都合で參觀できなかったが、農村の中に部分的に城墻が殘存しているとのことである。遺跡はほぼ正方形で、東西三三〇〇メートル、南北三二〇〇メートルで、城内には東西・南北各四條の幹道が井の字形に排列され、路面上には車轍の痕跡が發見されたという。『史記』秦本紀には、德公の元年（前六七七年）に雍城に遷都して〈大鄭宮〉に居したと言い、『括地志』には、大鄭宮は岐州雍縣の南七里の故雍城にあると言う。雍城遺跡内の姚家崗宮殿建築區で宮殿の遺構を發見し、梁と柱等を連接する蟠虺紋の入った青銅製の構件六四件が出土したので、この宮殿遺構を大鄭宮と推測している。他にも朝寢（國君が政務を執るところ）・

宗廟・凌陰（藏氷庫）等の遺跡がある（圖9）。『史記』秦本紀には、獻公二年（前三八三年）に櫟陽に築城、その後、孝公一二年（前三五〇年）に咸陽に築城遷都したとあるから、雍城を都城とした期間は二九四年間にも亘り、德公・宣公・成公・穆公・康公・共公・桓公・景公・哀公・惠公・悼公・厲共公・躁公・懷公・靈公・簡公・惠公・出公・獻公ら一九人の秦公がここを都城と定めた。從って雍城周邊には秦公一號墓以外の陵墓が點在しており、鳳翔縣南指揮鎭南指揮村から郭店鎭三岔村に至る一帶、東西約一二キロ、南北約三キロの雍城秦公陵園（鳳翔縣城の南西）内では陪葬車馬坑を伴う多くの大墓が發見された。また穆公の墓は鳳翔縣博物館に隣接した西院にあり、その西門には淸の畢沅（陝西巡撫）が題寫した〈秦穆公墓〉の石碑が建ち、ほど近い城南の翟家寺村の畑の中に、殉葬された三人の子車氏の〈三良冢〉があり、やはり畢沅が篆文で書いた〈秦三良冢〉の石碑が建っているという。

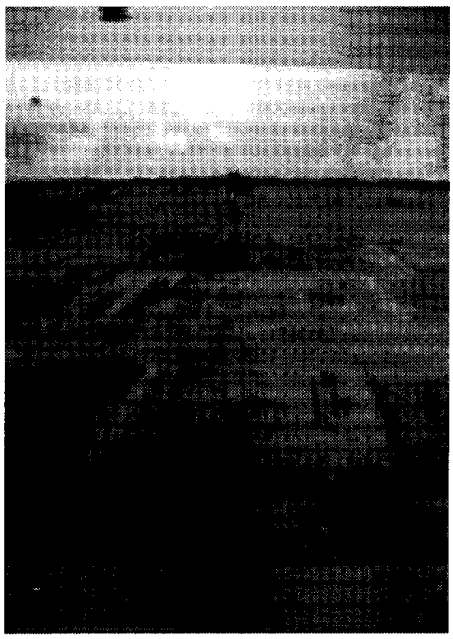


圖9　雍城宗廟遺跡の寫眞

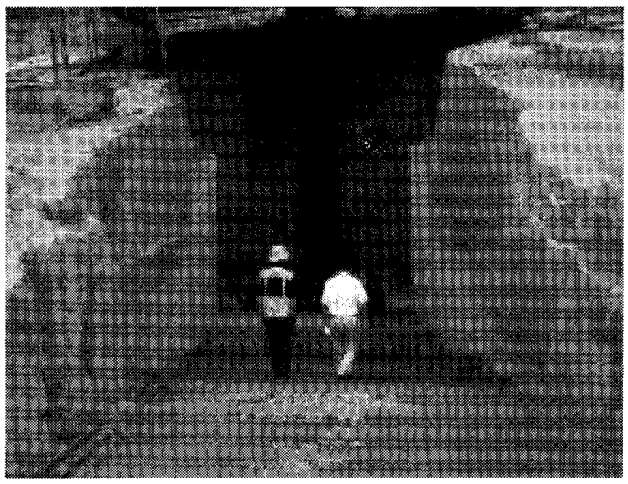


圖10　周公廟遺跡の18號大墓

周公廟遺跡と周公廟および鳳翔縣博物館

晝前に鳳翔縣博物館に立寄ったが、既に晝休みで午後二時から開館すると言うので、周公廟遺跡參觀の後に再度訪問することにした。岐山縣で晝食を取り、午後から周公廟遺跡を訪ねた。遺跡は岐山縣城西北郊七．五キロの鳳凰山南麓に位置し、周公廟の裏山に當たる。この遺跡は二〇〇三年一二月に北京大學考古文博學院の徐

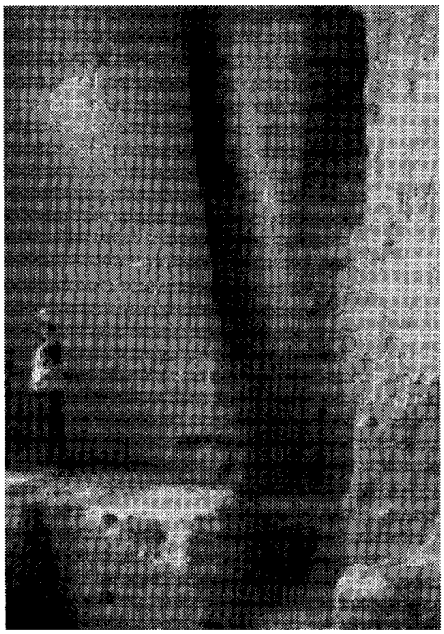


圖11 18號大墓の西墓道と盗洞

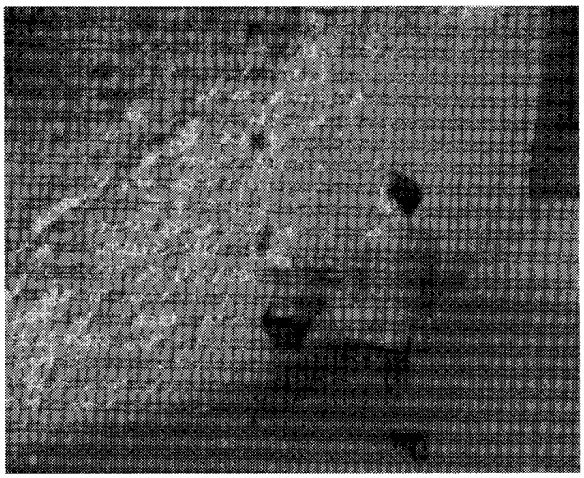


圖12 盗掘者が足をかけた穴

天進教授（周公廟考古隊副隊長）が學生等と共に發掘調査中、兩片の甲骨（刻辭數五五字）を發見して注目を浴びた。その後、陝西省考古研究所と北京大學考古文博學院が聯合で周公廟考古隊（隊長は陝西省考古研究所副所長の王占奎氏）を組織し、廣範圍の調査を行った結果、大型の西周貴族墓葬群二二座を發見。そのうち四條の墓道を具えるものが一〇座もあり、また墓地を圍む東・北・西三面に計一五〇〇メートルの墻壁が殘存し、さらには兩座の灰坑を發見し、まとまった刻辭卜甲が出土した。この遺跡を仔細に觀察した北京大學考古文博學院の鄒衡教授は、「新中國最大の考古發見」と言い、また甲骨文の出土狀況から見て「西周の殷墟となる可能性がある」と言っている。發掘當初は〈西周王陵〉ではないかと喧傳されたが、盗掘がかなり酷くて陪葬品がほとんど殘っていないため、現在は〈西周貴族墓葬群〉と言って、愼重な對應を取っている。ただ『詩經』（大雅）や『史記』等の記述に據れば、古公亶父（太王）の時に豳（彬縣・長武・旬邑一帶）の周人等は古公に率きいられて岐（岐山脚下）に遷っているから、岐山の南邊にある周公廟遺跡や周原遺跡の範圍内に周王の陵墓が存在する可能性を否定できない。

遺跡はちょうど二次發掘が始まったばかりで、考古隊副隊長の徐氏が周公廟脇の招待所に學生を連れて來ていた。中國社會科學院歷史研究所の王震中氏の紹介狀を持って徐氏に面會し、午後の休息中に發掘現場を案内してもらった。遺跡は周公廟裏山の斜面に位置するので、現場までは徐氏の運轉する四輪驅動車に

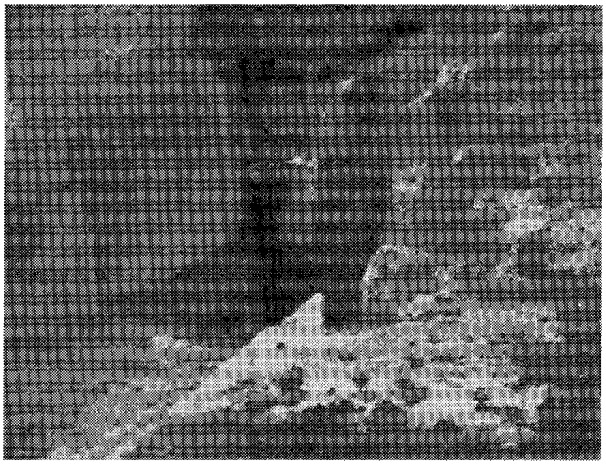


圖13　周公廟遺跡の32號墓

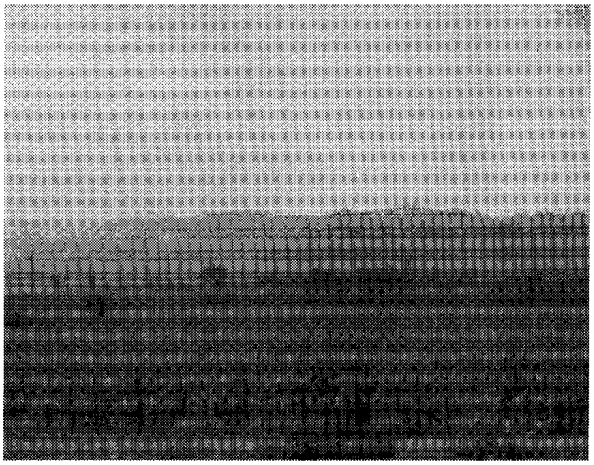


圖14　工作站から鳳凰山を眺む

乗せてもらい、村道から悪路を五分くらい登った。徐氏の説明に據れば、墓葬群は山麓に點在し、西側山麓には未發掘（未發表）の中型小型の貴族墓がかなり殘っているという。トタン屋根に覆われた一八號大墓は秦公一號大墓を見た後だけに、思ったほど大きく感じなかった（圖10）。この大墓は墓葬群の中部に位置し、四條の墓道を具えており、主墓道は南墓道で、幅四．五メートル、その他の墓道は幅約〇．九メートル。南北の墓道の長さは一七．六メートル前後、東墓道は長さ一二．四メートル、西墓道は長さ七．五メートル。墓室は正方形に近く、縦六．八メートル、横六．四メートル。盗洞が九箇所あり、西墓道の脇に沿うように大きな盗洞が掘られ（圖11）、周圍の墓壁には盗掘者が足をかけるために開けた穴が多數あった（圖12）。従って陪葬品はほとんど持去られ、わずかに盗洞から大小各一箇の殘缺した石磬が發見され、大石磬は殘長が六〇センチ餘りで、もし完全なものであれば一メートルを超え、出土した西周時代の石磬としては最大のものということであった。次に拜見した三二號墓は山麓南端の一條の溝の下部に位置し、墓の上層部は溝の流水に削取られていた（圖13）。やはり周圍の墓壁には數箇所の盗洞が掘られ、一件の原始瓷器片が發見されただけで、瓷器の底部の外面には〈自宮〉の兩字を含む五文字が確認されている。

周公廟を眼下に見おろす發掘現場には休息のためのプレハブ小屋が建てられ、そこからは南方渭河の方向を眺望でき、延々と續く畑には耕牛を操る農民の姿があっ

た。その畑は試掘によって建築遺構のあることが確認されており、來年にも發掘作業が始まるという。周公廟の東南約一キロからは製陶作坊遺跡が、大墓區の東邊からは鑄銅作坊遺跡が發見され、また上述のように、山麓南端下の兩座の灰坑（2004QZH1・2004QZH2）からは卜甲がまとまって出土し、特にH1灰坑と兩座の灰坑の土を取って塡いだ近くの廢棄灌漑水渠から多數出土した。H1灰坑の形成年代はおよそ西周中期偏晩、H2灰坑は西周早期ということであるから、卜甲の年代は灰坑の形成年代を下らないことになる。出土卜甲七六〇片は綴合して五〇〇片となり、刻辭のあるものは九九片、認識された文字數は四九五字にも達っする。そのうち重要な人名は〈王〉〈周公〉〈太保（召公）〉が、重要な地名は〈周〉〈新邑（雒邑？）〉が確認され、〈周公〉は七回、〈王〉と〈太保〉は各三回、〈周〉は六回、〈新邑〉は五回出現している。遺跡から一・五キロ程離れた畑の中にある工作站へ移動して周公廟遺跡の出土品を拜見（圖14）。擴大鏡附きの箱に入り綴合された二片の卜甲は、〈周公〉の文字が確認できる（圖15）。青銅製の出土品は、蓋の無い器だけの簋一件（器底に數字の銘文あり）、器の無い蓋だけの簋一件（蓋の裏に二行一二字の銘文あり）、蓋の無い香爐のようなもの一件、夔鳳紋を象った飾り一對、車軸か何かの先に附ける飾り一件（人面模様あり）等があった。他に殘缺した原始瓷器二片、黃白色の璜一件（夔鳳紋入り）、棕色の殘缺した璜あるいは璧一件（夔鳳紋入り）、一八號大墓の盜洞から發見された大小の殘缺した石磬、大小の石磬とも燒けた痕なの

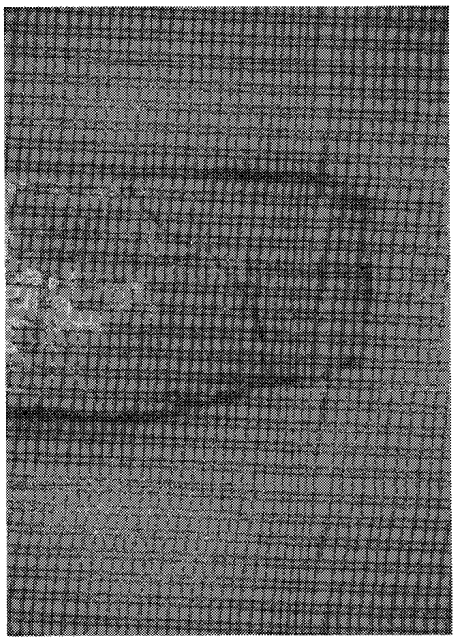


圖15　綴合された甲骨と刻辭

圖16 周公廟の前に立つ周公像

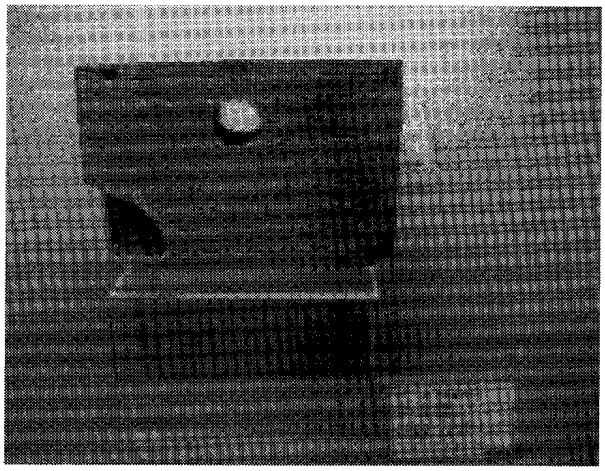


圖18　梁と柱等を連接するための構件

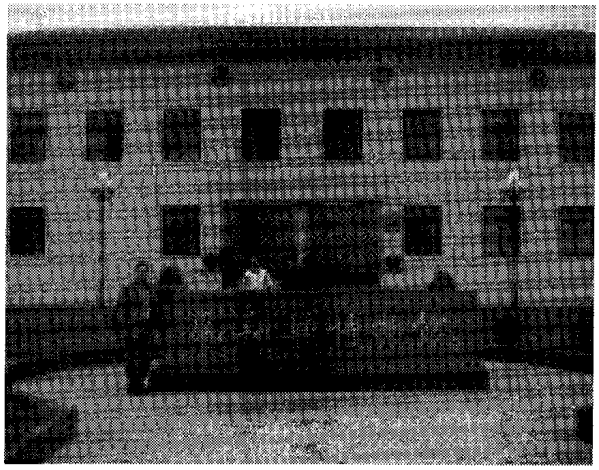


圖17　鳳翔縣博物館

か表面が黒く、四〇センチ足らずの小石磬は吊すための穴が開けられていた。

遺跡見學後に周公廟を參觀。正門から續く參道は木々に覆われて靜寂に包まれ、參道を抜けたところには易卦を持った周公の像が立ち（圖16）、その奥に周公の廟があり、周公を眞ん中に、向かって右に召公の、左に太公（呂尚）の廟があり、更に奥には姜源の廟があった。參觀後、徐氏に別れを告げて午前中に參觀できなかった鳳翔縣博物館へ移動（圖17）。博物館では〈秦人尋根―雍城史跡展〉と題して、遺址・窖藏・墓葬の三部に分けた展示を行っていた。展示品は雍城時期のもので、建築材料・禮器・車馬器・生産工具・陪葬品等であり、展示點數は少なかったが、特に建築材料の構件（春秋期）や生活工具の鋸（戰國期）等が印象に殘った（圖18）。ただ殘念ながら、時間の都合で隣接する穆公の墓を見ることができなかった。

周原遺跡と周原博物館および文物複製廠

八月三一日午前、扶風縣法門鎮の周原博物館文物複製廠を訪ね（圖19）、徐氏が紹介してくれた張恩賢館長に面會し、周原遺跡參觀の案配をしていただいた。文物修復係の楊水田氏の案内で先ず賀家村の岐山縣周原博物館を參觀（圖20）。一九九一年に一度訪れたことがあるが、その時には「博物館」ではなく「工作站」の看板が掲げられていた。管理人の趙雙科氏から展示室（周原遺址西周文物展覽廳）に保管された展示品の説明を受けたが、肝心の周原甲骨は展示室内の金庫に保管されて

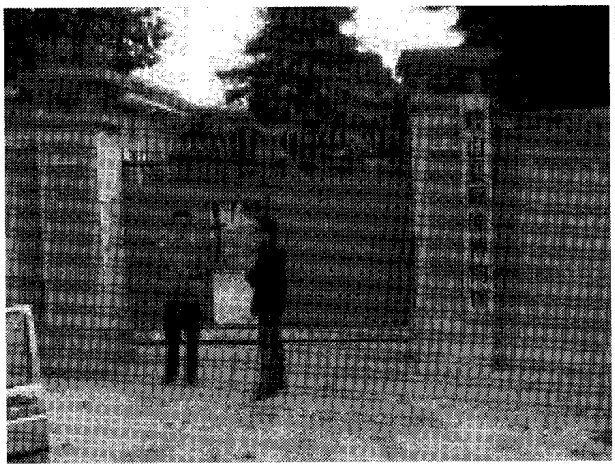


圖20　岐山縣周原博物館

圖19　周原博物館文物複製廠

いて、鍵は文物局にあり、前もって許可を得てないと見ることができないということであった。最近は一級文物に對する管理が嚴しくなっているようである。代わりに趙氏が撮った甲骨文の寫眞や青銅器の紋様などの拓本を見せてもらい、拓本を分けてもらうことができた。

チャーターしたタクシーが故障のため別の車で賀家村の北に位置する鳳雛村（岐山縣）の宗廟遺跡（甲骨發見場所）へ移動。遺跡は薄く覆土されているが、遺構の柱の跡に目印のために石を置き、遺構の位置を分かりやすくしている（圖21）。以前にはこの様な配慮はまだなかった。この遺跡からは北方に岐山の山並みを眺望することができる。次に召陳村（扶風縣）の宮殿遺跡に併設されている周原博物館を見學。博物館前には以前と同様に周公の像が立っており、展示館入口の上に平假名で「しゅうげんはくぶつかん」と書かれていたものは取拂われ、展示館前に青銅器の文様を圖案化したオブジェが建てられていた（圖22）。展示館内の展示品は、以前は青銅器類が主で、史墻盤や一九七八年に扶風縣齊村から出土した㝬簋（西周厲王時、銘文一二四字、最大の出土銅簋の一件であるので〈簋王〉と、また厲王が先王を祭祀して作ったものであるから〈王簋〉とも稱される。扶風縣博物館藏）等も展示され、その拓本も賣っており、周原甲骨も展示されて細字の甲骨文が擴大鏡を通して見られるようになっていた。現在は一九九九年以降に齊家村の東と北・賀家村の北・王家嘴村の北・莊李村の西等を發掘し、發見された先周と西周時代の墓葬

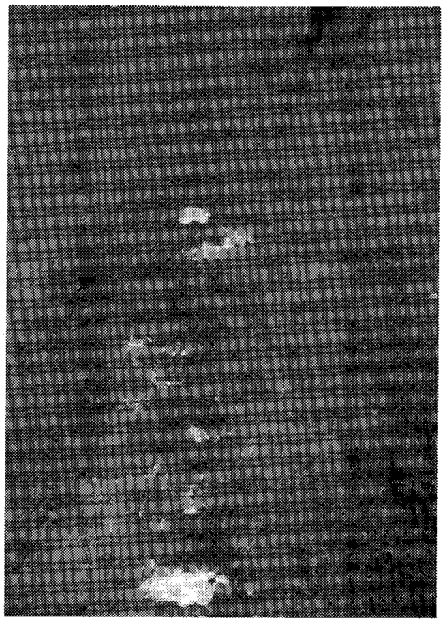


圖21　遺構の上に置かれたの石

二〇五座・車馬坑二座から出土した陶器類を主に展示しており、殘念ながら青銅器は少數であった。しかも展示された青銅器は全て複製であった。一九四一年に扶風縣任家村の窖藏から出土した梁其壺一對（實物の一件はアメリカに流失、西周期、蓋に牛の形の鈕あり）・一九九四年に扶風縣劉家村から出土した王盂（成王・康王時、破壞殘缺して底部〔圈足〕や取っ手〔耳〕等が殘っているのみ。底部に銘文八字、周王の所作を記しているから〈王盂〉と命名された）、その他に圓罍一對（西周晩期）や簋一件が展示されていた。

次に博物館の脇にある宮殿遺跡を參觀。宗廟遺跡と同樣に薄く覆土され、遺構の柱の跡に目印のための石が置かれていた。參觀後、法門寺へ戻り、寺院の側のレストランで鄕土料理（何種類もの麺）を賞味し、午後から寺院および博物館を參觀。以前とはだいぶ樣子が變わっており、博物館（寶物館）は立派になり、唐の憲宗皇帝が宮中に迎え入れたという佛骨（釋迦の指骨）や入物（金銀製の函）も見やすく展示されており、塔（眞身寶塔）の地下には唐代の地下室の扉などが見られるように工夫されていた。また塔の周邊には唐代の境內を復原するかのように新たな寺院が建てられており、他にも佛教研修所などを建てる預定で、管理・建築費用等いっさい國からの援助を受けていないという。

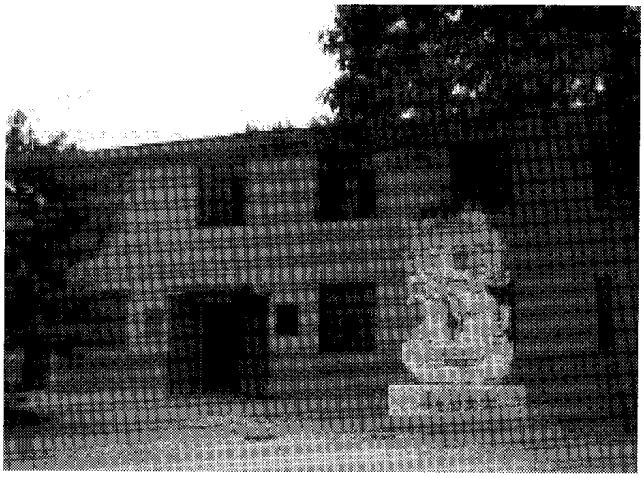


圖22　周原博物館の展示館とオブジェ

法門寺參觀後、徒歩十五分程の所にある周原博物館文物複製廠に戻り、青銅器の複製工程を見學。ここでは青銅器の

型（範）を實物から取っているということで、銘文もかなり精巧に作られ、史墻盤や最近發見された逨盤等の銘文も型が取られており（圖23）、銘文の拓本制作もやっているというので、見學後に拓本を分けてもらった。拓本の種類は多く、史墻盤や㝬簋の他にも、一九九七年に扶風縣段家鎭大同村から出土した宰獸簋（西周中期、銘文一二九字、懿王の册命を記録。陝西歴史博物館藏）・一九七六年に扶風縣莊白村の窖藏から出土した三年瘨壺（大小兩件、西周中期、蓋榫外側に銘文六〇字、周原博物館藏）・一九七五年三月に扶風縣莊白村から出土した伯㦰簋（西周穆王時、銘文は器蓋に各一三四字、玁狁（淮戎）を征伐したことを記す。扶風縣博物館藏）等の拓本があった。また張館長と共に周原博物館首任館長の羅西章氏の令孃が同席し、羅氏編著の『扶風縣文物志』（羅西章編著、陝西人民教育出版社、一九九三年）・『周原尋寶記』（羅西章・羅紅俠〔令孃の妹〕著、三秦出版社、二〇〇五年）等を分けてもらった。故障したタクシーも修理完了し、法門鎭に別れを告げて寶鷄に戻る。法門鎭から南下した邊りの、渭河北岸に位置する眉縣馬家鎭楊家村の青銅器窖藏跡を參觀したかったが、時間もなく、現場を知っている者でないと分からないということで、またの機會に讓ることにした。

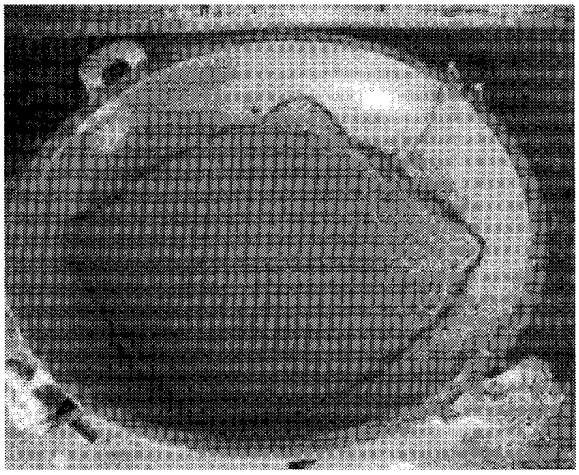


圖23　蠟で作った逨盤の型